

“おじいちゃん、の生涯が文庫化

いわき在住女性が調べた “最後の特攻隊、の真実

産経新聞グループの潮書房光人新社は、光人社 NF 文庫『8月15日の特攻隊員』を発売しました。著者は福島県いわき市在住の主婦、道脇紗知さん（45）。79年前の1945年8月15日夕、敗戦を告げる玉音放送から5時間後、大分から米軍が占領する沖縄に特攻機11機が飛び立った通称「宇垣特攻」について、戦後に生まれた道脇さんが足跡をたどりました。

【公式ホームページ】<http://www.kojinsha.co.jp/>

■2年半・手紙300通・30人超取材

執筆のきっかけは、道脇さんの“おじいちゃん、（正確には曾祖父の弟、いわき在住）が宇垣特攻で戦死していたため。25歳当時、親族の葬儀をきっかけに祖母から“おじいちゃん、のことを聞かされました。

「戦争体験を語れる人はどんどんいなくなる」「何とかしなくては。いま、私たちが語り継がないと」と思い、取材を始めました。

当時は大学の事務補佐員として働いていましたが、休日などを利用し2年半かけて取材。出した手紙は300通、全国を行脚し30人超に話を聞きました。

著書では、“おじいちゃん、を中心にどういう部隊をたどり、何を体験したかを克明にまとめました。防衛省や、特攻から奇跡的に帰還した人からの聞き取りを行い、宇垣特攻の一員となる背景や様子なども記載。“おじいちゃん、の帰りを、いわき市で戦後ずっと待ち続けた許嫁（いいなずけ）からも話を聞いています。

道脇さんは「文庫になると思っていたなかったのでうれしい。“おじいちゃん、のような若者が生きていたことを知ってもらい、平和を考えてもらえればうれしい」と話しています。

【定価】1080円 ※単行本は2007年に新潮社から刊行。

いわき市内の主要書店を中心に、特設コーナーが設けられるなどしています。

8月15日の 特攻隊員

道脇
紗知



玉音放送から5時間後——
“おじいちゃん”は
なぜ出撃したんだろう？

終戦後、沖縄米軍めがけて突入した「宇垣特攻」。肉親の足跡を、戦後に生まれた25歳の女性が追う

光人社NF文庫